

社会学科 後藤ゼミ

「せめぎあいつつむぎあいのダイナミズム」

北條貴彦（2004年度ゼミ長）

「放棄と捕捉、逃避と追求の中に、実際一層高い摂理が見られる」(ゲーテ「親和力」)。

2000年の貿易センタービル崩壊後、市民は「正義と悪」、「戦争と平和」といった二元論を疑い出した。人類の構成要員にあらゆる価値観・文化・歴史が内在していることに気づき、世界が多元的であることを理屈ではなく、感覚として理解したように思う。

この極めて多様な多面的な現代の世界・社会都市を捉えるために、後藤ゼミは「東京」を研究対象とする。多くの人が住み・働き・遊び・集う場所、「東京」。我々が普段目にしている風景や場面を写真に収めて、「東京」と「東京人」の諸相を読み込み、社会的に分析するのが後藤ゼミのプロジェクト「写真で語る…「東京」の社会学」である。

ゼミの特長は、個々人、また班ごとに調べ考えたことを報告し討論するときに最大に発揮される。互いの異質性を認め合った上で「己」の意見主張を伝える、他者と自分との距離を計りつつ、試み、実践し、磨き上げていくプロセスが後藤ゼミの活動である。ちなみに、ゼミ担当者の後藤先生は、「成熟した市民社会」創出の鍵として「せめぎあいつつむぎあいのダイナミズム」の重要性を唱え、ゼミの旗に掲げている。

後藤ゼミでは1999年度より、3・4年生合同でのゼミ制度を取り始めた。ゼミ内における全ての活動は3・4年一緒にこなわれ、互いを高め合い、ゼミ全体の意識能力レベルの底上げを実現させている。

ゼミの主な活動を紹介しておこう。

● Life History & Life Plan (4月) — およそ20年間の人生を振り返り、自分が何者であるかを整理し発表し話し合う。人にわかる言葉に置き換える難しさを知る。

タウンウォッチング(6・7月) — 今までの単なる通過点であった道や建物や街がどういった文化的歴史的背景によって在り、その地域を特色付けているのか、新たなストーリーの発見を目的に各地を練り歩く。

● ゼミ合宿(8月) — 3泊4日の闘いと癒し。桜麗祭の作品に成り得る写真30点を「社会調査の方法」その他の受講生やゼミ生が提出した300点の中から選ぶ。夜中の12時過ぎまで練り広げられる議論。社会学的にどう語られるかが最大のポイントであり、何気ない一枚の写真が多くを語ることへの驚きを感じる。

作品タイトル&解説文作り(9・10月) — 各班が5点の作品を受け持ち、独自に調査を行って(データ収集と分析)、社会学的な知を織り込んだ文章を作成。批判調査、考察解釈の連続。

● 桜麗祭での展示・発表(11月) — ゼミ内で行われる活動は、全てこの展示「写真で語る…「東京」の社会学」に集大成される。過去6度の「桜麗祭大賞」を受賞。

後藤範章先生から一言
10年間を振り返って
ゼミ生の創意と輝き！

「写真で語る…「東京」の社会学」プロジェクトを1994年度に始めてから、早いもので10年が経ちました。この10年間に「東京」も「東京人」も大きく変化しています。それは「成

長／前進／進歩」とも「衰退／後退／退歩」とも見る事ができますが、後藤ゼミは確実に成長し前進し進歩し続けていると言つてよいでしょう。

北條君も触れていますが、1999年度に3・4年生(40名)合同・2時間連続のゼミにして以来、ゼミ生たちは1年間ワンサイクルのゼミ活動を2年連続で経験できるようにになりました。フィールドワークや作品づくりにかける時間も、大幅に増えました(正規外の時間も入れると平端ではありません)。このことにより、成功／失敗経験の蓄積と継承が図られ、新しいものを生み出すとする意欲、自発性・内発性がより一層高まりました。

既にホームページで公開している作品は、約300点。歴代の卒業生の力も借りて、ほぼほぼ成果を出版して世に問いたいと考えています。

神様の不透明化

明治神宮と明治天皇の関係性



明治神宮での神前結婚式の1コマ。神前式の人気が下火になっている中で、年間約千組もの式が行われる。初詣参拝客数23年連続全国一位(三が日で約300万人)という数字にも、最も有名で人を集める神社であることが現れている。1920(大正9)年、「明治天皇を神として永遠に祀りたい」との「国民の熱誠」により創建された明治神宮。天皇の神聖性・カリスマ性は絶

大なものがあつた。それは「神宮の森」を構成する10数万の木々のほとんどが献木ということからも読み取れる。しかし今、明治神宮の祭神が明治天皇である事を知っている人は、意外なほど少ない。私たちが2003年10月21日(火)に実施した参拝者の調査(10歳代・70歳代を任意に抽出)では、100人中実に71人が知らなかった。「神様としての明治天皇」は、もはや人を惹きつける主要なファクターではなくなっているのである。

交通の至便性、広大な豊かな緑、明治神宮やその参道(表参道)を含めた原宿のブランド性といったものが、神の存在を不透明化してやまない現代人をここに集めさせている。

2003年5月24日(土)15時半頃
明治神宮 渋谷区代々木神園町にて撮影



※(右)この作品は、2003年度桜麗祭での展示会場に來場された方々による投票の結果、第6位(18票)となった作品です。ちなみに、2003年11月20日付「日本大学新聞」で紹介された「対向するまなざし」―浜離宮と汐留との「借景」関係―は、第2位(30票)でした。

※(上)「桜麗祭大賞」を受賞した直後の展示会場での集合写真。ゼミ生全員が写っていないのが残念ですが、満面の笑みの背後に写っている展示の様子にも注目下さい。原則として毎年30点を作品化して展示していますが、例年3日間の桜麗祭期間中、約2千名の方々に見ていただいています。

〈2003年度の作品から〉

◎「東京人」観察学会(日本大学文学部社会学科・後藤ゼミ)

GAKUSO

特集

地域とつながる 文理学部

- 教職ボランティア
- 理科実験フェア・移動教室
- 文理学部の施設開放紹介
- 新学科紹介
- 学科ホームページ紹介
- 教員紹介
- ゼミ紹介
- 教員著作紹介
- 就職ガイド
- サークル紹介
- 学生投稿

学叢

March
2004
NO.72

